

2015年12月6日(日)朝10:10～ 降誕節前3、待降節第2、クラブ会等
12月第1聖餐総員共同主日礼拝式説教 日本アライアンス庄原基督教会

説教題：**彼の口が、開け、 神をほめたたえた**

聖書：ルカ 1章57～66節

＜口語訳＞

新約聖書84頁

ルカ 1章57～66節

＜新共同訳＞

新約聖書101～102頁

ルカ 1章57～66節

＜新改訳第3版＞

新約聖書107～108頁

ルカ 1章57～66節＜塚本訳＞

新約聖書169頁

主題：主イエス様から賜った聖霊の導き
によって主の弟子たちは、主の名による
神の罪からの救いを宣べ伝えたように、
私たちも、福音を伝えたい。

序論；

◇ルカ1章は、神の御子主イエス様の誕生が、「ルカ2章の救い主の誕生」に向けて、「神の語り」が、第1幕(1:5～23)「ヨハネ誕生予告」、第2幕(1:26～38)「救い主誕生予告」、第3幕(1:39～56)「ヨハネの母となるエリサベツと救い主の母となるマリヤの対話」が、ルカによって、記録されています。

◇ルカ1章57～80節は、第4幕で、57～66節が、エリサベツによるヨハネの誕生、67～80節が、ザカリヤの預言のことばの2つの区分から成り立っています。

⇒本日は、57～66節から「ヨハネの誕生」と、これを取り巻く親族などの人々と、神の天使から神のことばを受けていたザカリヤや妻のエリサベツとの思いの違いが描かれます。

⇒神の天使が語りかけた時、ザカリヤは、神のことばを信じず、口も、耳も、神から撃たれ、閉ざされていましたが、「ヨハネの名の命名」を契機に、ザカリヤの口は開かれたのです。

⇒また、エリサベツも、「いけません、ヨハネとつけなくては」と、親族の発言を拒否します。

本論；

◇本日、ルカ1章57～66節から主の使信に
思い・心をとめます。

◆ルカ1章57～64節；ザカリヤは、口が開け、
神をほめたたえました。

◇57～66節；塚本訳◆ヨハネ誕生

「57 月満ちて、エリサベツは男の子を産んだ。

58 近所の者や親類は、主がエリサベツに
大きな憐れみをほどこされたと聞いて、
自分のことのように喜んだ。

59 (誕生から)八日目に、この人々が幼児に
割礼を施すためにあつまったときのこと、
(慣例もあり)父の名にちなんでザカリヤと
名をつけようとする、

60 母親が、『いけません、ヨハネとつけなくて
は』と言って反対した。

61 彼らは、『あなたの親類には、そんな名前
の者は一人もない』とエリサベツに言って、

62 父親に、何と名をつけたいかと身振り
でたずねた。

63 ザカリヤは石板を頼んで、『あれの名は
ヨハネ』と書いたので、皆が不思議に思った。

64 するとたちどころにザカリヤの口が開け舌が動き出してものが言えるようになり、神をほめたたえた」と、ルカ語っています。

◇ 57～58節；「月満ちて、エリサベツは男の子を産んだ月満ちて、エリサベツは男の子を産んだ」、「近所の者や親類は、主がエリサベツに大きな憐れみをほどこされたと聞いて、自分のことのように喜んだ」と、ルカは、ヨハネの誕生が、「近所の者や親類」の喜びとなり、「主が大きな憐れみをほどこされた」と聞いて、「自分のように喜んだ」ことを伝えています。

⇒エリサベツの高齢出産等ゆえ、「神」を彼女と共に「あがめたμεγαλύνω」、マリヤの「讚歌マグニフィカートmagnificat ← magnificō」と同じことばが用いられ、「神のあわれみ」を強め、「大きな」となっています。

⇔「ヨハネの誕生」は、「大きな憐れみをほどこされた大きな憐れみをほどこされた」。

◇ 59～64節；集まった人々が「父の名にちなんでザカリヤと名をつけようとする」と、「『いけません、ヨハネとつけなくては』と言ってエリサベツは反対した」、ザカリヤは「石板」に、

「『あれの名はヨハネ』と書いた」と、ルカは、
医師らしく事実のみを記録しています。

⇒「たちどころにザカリヤの口が開け舌が動き
出してものが言えるようになり」、「ザカリヤ」
は、「神をほめたたえた」というのです。

⇒TK師は、ザカリヤが「舌が開ける」と、「神を
ほめたたえた」ことを口が閉ざされた間、
ザカリヤが心に秘めていた思いだったと解説
し、マルチン・ルターのことば、「不信仰が
沈黙せしめた人を、聖霊が預言者と変える」
を引用、祭司ザカリヤが、「神の預言者」へと
変えられ、その子、ヨハネが、「神の預言者」と
される道筋を語るのです(次週、見ます)。

⇒TK師は、マルチン・ルターの「不信仰が沈黙
せしめた人」に言及、天使を通して、神が、
ザカリヤの不信仰ゆえ、口を閉ざされたが、
「み霊が預言者へ変えた」と、「不信仰」のおし
ゃべりが、教会にも蔓延していることを嘆いて
おられます。

⇒「不信仰が沈黙せしめた神」は、「神をほめ
たたえる神の預言者の口」を「開いて」語らせ
て下さる神だということです。

◆ ルカ1章65～66節 ; ザカリヤの讚美のことばを聴いた人々は、ヨハネ名に込められた神の恵みを覚え、神を恐れしました。

◇ 57～66節 ; 塚本訳 ◆ ヨハネ誕生

「65 近所の者に皆恐れが臨んだ。そしてこのことがことごとくユダヤの山地全体の評判になったので、

66 聞いた者は皆これを胸におさめ、『この幼児はいったい何になるのだろう』と考えた。主の(恵みの)御手もまたたしかにこの幼児に働いていたのである」と、ルカ語っています。

◇ 65～66節 ; 「近所の者に皆恐れが臨んだ」、「ユダヤの山地全体の評判になった」、「聞いた者は皆これを胸におさめ」、「主の(恵みの)御手もまたたしかにこの幼児に働いていた」と、ルカ語っています。

⇒ ザカリヤは、舌が解けると、心の思いを込めて、「神をほめたたえました」が、集まった人々は、「主がエリサベツに大きな憐れみをほどこされたと聞いて、自分のことのように喜んだ」のに、「近所の者に皆恐れが臨んだ」のです。

- ⇒「聞いた者は皆これを胸におさめ」、「主の（恵みの）御手もまたたしかにこの幼児に働いていた」のに、「近所の者に皆恐れが臨んだ」ことに、TK師は、「不信仰が沈黙せしめた人」を「神をほめたたえる預言者」に変える神をザカリヤは、マリヤのように「讃歌マグニフィカートmagnificat←magnificō」を口にできましたが、「不信仰が沈黙せしめた人・神の思いを喜ばない」人々には、「恐れが臨んだ」と仰せです。
- ⇒ヨハネは、「ヤハウエ(主)は慈しみ深い」という意味の名前で、「ヤハウエ(主)」は、マリヤの胎内宿られた主・神の御子をさしています。
- ⇒「神の御子主イエス・キリスト様」は、「慈しみ深い・大きなあわれみ」のお方です。
- ⇒TK師は、パンセを書いたパスカルが、妹さんから、「お兄さんあなたは本当に悔い改めたのならそんなに嬉しそうにしていたらだめだ」と言ってたしなめたそうですが、パスカルは、回心して、神を知った喜びによって、本当に嬉しそうにしていたのだと、語っておられます。

結論；

- ◇神は、変わらない愛と思いやりの神です。
- ◇ルカ1章は、神の御子主イエス様の誕生が、「ルカ2章の救い主の誕生」に向けて、「神の語り」が、第1幕(1:5～23)「ヨハネ誕生予告」、第2幕(1:26～38)「救い主誕生予告」、第3幕(1:39～56)「ヨハネの母となるエリサベツと救い主の母となるマリヤの対話」が、ルカによって、記録されています。
- ◇ルカ1章57～80節は、第4幕で、57～66節が、エリサベツによるヨハネの誕生、67～80節が、ザカリヤの預言のことばの2つの区分から成り立っています。
- ⇒「救い主なる神を喜びたたえる」ことが、マリヤを支え、神礼拝・信仰告白に生きる者の力の源です。
- ⇒「聖^{ἅγιος}なる神は(49～50節)は、「力の強いお方がわたしに大きなことをしてくださった」、「そのお方の名は聖で」、「その憐れみは千代よろず代とかぎりなく、そのお方を恐れる者にのぞみましょう」は、「神を喜ぶ者の恵み」。

- ⇒ ザカリヤとエリサベツは、「ヤハウエ(主)は慈しみ深い」ヨハネを与えられ、「神を讚美」、マルチン・ルターのことば、「不信仰が沈黙せしめた人を、聖霊が預言者へ変える」を心にとめ、「不信仰のおしゃべりに沈黙せし、神をほめたたえる預言の讚美のことば」を語り合いたいと願います。
- ⇒ ザカリヤの「讚歌マグニフィカートmagnificat ←magnificō」も、教会を慰めます。
- ⇒ 「ヤハウエ(主)は慈しみ深い・大きな憐れみのお方」であることを「胸におさめ」、「主の(恵みの)御手もまたたしかにこの幼児に働いていた」と、「神の働き」を喜びたい。
- ⇒ 「不信仰が沈黙せしめた神」は、「恐れるお方」でなく、「ほめたたえるお方」なのです。
- ⇒ 「『卑しい召使にまで目をかけてくださった』から」、「わたしの心は主をあがめ」、「わたしの霊」は、「救い主なる神を喜びたたえる」とのマリヤの讚歌マグニフィカートmagnificat ←magnificōは、「その憐れみは千代よろず代とかぎりなく、そのお方を恐れる者にのぞみましょう」。